

イザヤ書9章8節－12章「回復するダビデ王朝」

1A エフライムへの裁き 9:8－10:4

1B 建て直せるという高慢 8－12

2B 懲らしめの軽視 13－17

3B 互いの噛み合い 18－21

4B 不正な裁判 1－4

2A アッシリヤへの裁き 10:5－10:34

1B アッシリヤの高慢 5－19

1C 前例による征服 5－11

2C あべこべの役割 12－19

2B 定められた壊滅 20－34

1C 残りの者の立ち返り 20－27

2C 倒れる高い木 28－34

3A 実を結ぶ御国 11－12

1B エッサイの根

1C 主を知る統治 1－10

1D 主の霊 1－5

2D 平和の広がり 6－9

2C 残りの者の帰還 10－16

4B 救いの喜び 12

1C 救いの保証 1－3

2C 喜びの歌と宣言 4－6

本文

イザヤ書9章を開いてください。私たちの学びは、9章8節から始まります。6章においてイザヤが主から召しを受けて預言を行ないますが、その時代はアハズがユダの王の時でした。アハズは、主なる神のところに来ない王でした。そして、その代わりにあらゆる周囲にある偶像をユダの国に持ちこんだ者でした。しかし、それらの神々は彼を助けませんでした。むしろ、周囲の国々が攻め入ってきます。そしてついに、北イスラエルとシリヤが企んでユダを攻めようとしています。

そこに、北から勢いよく攻めてくる帝国があります、アッシリヤです。主は、イスラエルとシリヤを裁かれるためにアッシリヤを用いられようとしています。北イスラエルの王ペかも、シリヤの王レツインも、三年もしないうちにアッシリヤによって殺されます。しかし、ユダの王アハズはこともあろうに、主の言葉を無視して、主に拠り頼まないでアッシリヤに頼ろうとしました。事実アッシリヤは、二人の王を倒しました。ところが、主に拠り頼まないでアッシリヤに頼んだので、アッシリヤはシリ

ヤとイスラエルだけでなく、ユダの町々にも攻めてくるという預言をイザヤは行いました。

それで主は、イザヤを通して 7 章と 8 章においてユダがアッシリヤに攻められることを語られました。しかし、この暗黒の中で主は一筋の光を与えられました。それは、救い主の誕生です。この方が「神が共におられる」という名、インマヌエルと呼ばれます。処女から生まれる、神であり、かつ人である方がこれらの、まことの神を知らぬ国々によってユダが全滅するのを救われることを約束されます。そして、この方は、アッシリヤ捕囚以降、異邦人の支配によって虐げられたガリラヤ地方に来られることをイザヤが預言しました。そしてこの方は、神の御子と呼ばれ、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君(9:6)」と呼ばれます。この方がダビデの世継ぎの子となり、確かにダビデから永遠の神の国、平和の国が立てられる預言を行ないました。

したがって、アハズによって、靈的に滅茶苦茶になったダビデの国が、キリストによって建て直され、力強く世界を君臨することを預言したのです。私の生活、また私たちの生活がいかに主の御心を損なって滅茶苦茶になっても、主が建てられるのであれば、それは成ります。そして 9 章 8 節から 11 章においては、主に北イスラエルに対する預言になります。ユダと同じように、イスラエルが主の御心を損ない裁かれるけれども、残りの民が神に立ち返り、そしてダビデの末裔によって平和の御国が立てられるという約束です。

1A エフライムへの裁き 9:8-10:4

1B 建て直せるという高慢 8-12

9:8 主がヤコブに一つのことばを送られた。それはイスラエルに落ちた。9:9 この民、エフライムとサマリヤに住む者たちはみな、それを知り、高ぶり、思い上がって言う。9:10 「れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」9:11 そこで主は、レツインに仇する者たちをのし上がらせ、その敵たちをあおりたてる。9:12 東からはアラムが、西からはペリシテ人が、イスラエルをほおぼって食らう。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。

主が北イスラエルに対して御言葉を語られました。その言葉によって、イスラエルは弱くなり、脆くなっています。煉瓦が落ち、桑の木が切り倒されたという表現を使っています。ところが、弱くされたことが主からの注意喚起であることを考えもせず、「倒されたのであれば、また建て直せばよい」と思い上がっているということです。彼らは、イスラエルの立て直しのために、これまでは敵であったアラムの王レツインと手を組むことにしました。ところが、彼らがこれによって自分たちが守られると思っていたその方策が、かえって仇となっています。というのは、東にいるアラムがレツインに敵対していたのですが、イスラエルが同盟を結んだのでイスラエルもアラムの攻撃の対象となったのです。同じように、ペリシテ人もレツインと敵対していたので、同盟国イスラエルもペリシテ人の攻撃対象となったのです。このようにして、自分たちが脆くなった時に主の前に出てへりくだらずに肉に抛り頼んだので、かえってさらに、自分たちが弱められていく姿を描いています。

私たちの肉、心の頑なさにもつながることでしょう。自分が主によって弱められたにも関わらず、「いや、私は頑張らないといけない。」として、主の前にへりくだらないで、自分で建て直そうとする時に、かえってもっと弱められていくという道です。そして、「それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。」という言い回しがこれから、繰り返してできます。これは、彼らが悔い改めないでこの御怒りだけでは終わらない、ということです。

2B 懲らしめの軽視 13-17

9:13 しかし、この民は、自分を打った方に帰らず、万軍の主を求めなかった。9:14 そこで、主はイスラエルから、かしらも尾も、なつめやしの葉も葦も、ただ一日で切り取られた。9:15 そのかしらとは、長老や身分の高い者。その尾とは、偽りを教える預言者。9:16 この民の指導者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる。9:17 それゆえ、主はその若い男たちを喜ばず、そのみなしごをも、やもめをもあわれまない。みなが神を敬わず、悪を行ない、すべての口が恥ずべきことを語っているからだ。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。

「この民は、自分を打った方に帰らず、万軍の主を求めなかった。」という言葉、とても残念で痛々しい言葉であります。愛による鞭、主が心を痛めて懲らしめておられるのも関わらず、そこでへりくだらなかつた、ということです。そこで主が彼らが悟ることができるように、二つのものを切り取られたと言われています。それは民の指導者たちです。それから、偽預言者たちです。民の指導者は悪い者たち、彼らを迷わす者たちですが、それでも王がいたことによって国が守られていました。しかし、北イスラエルの末期は、王は非常に短命であり、その家来によって暗殺されて、その家来が王となって、さらにその家来が王を暗殺するという歴史でした。

さらに、偽預言者も取り除かれますが、王たちが頭と喩えられています。偽預言者は「尾」と喩えられています。なぜか？それは、王の意向をただ追従して、それを神の名によって預言していたからです。真の預言者は、王や民の意向に真っ向から対立していても、時流に迎合しない言葉を持っています。「8:12-13 この民が謀反と呼ぶことをみな、謀反と呼ぶな。この民の恐れるものを恐れるな。おののくな。万軍の主、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。」真実な信仰者たちは、主なる神を聖なる方とする集まりです。御言葉によって心を痛めて、そこを主が御霊によって聖所としてくださる集まりです。

3B 互いの噛み合い 18-21

9:18 悪は火のように燃えさかり、いばらとおどろをなめ尽くし、林の茂みに燃えついて、煙となって巻き上がる。9:19 万軍の主の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火のえじきのようになり、だれも互いにいたわり合わない。9:20 右にかぶりついても、飢え、左に食いついても、満ち足りず、おのおの自分の腕の肉を食べる。9:21 マナセはエフライムとともに、エフライムはマナセとともに、彼らはいっしょにユダを襲う。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。

イスラエルの地が、敵に攻められて火によって荒廃していく様子であります。それは敵の攻撃であると同時に、主の御怒りの現れでありました。そこで彼らは、心を頑なにし、悔い改めなかったので、「だれも互いにいたわり合わない。」ということをしします。つまり、仲間が噛み合って、食い合っているという状態です。ですから、仲間であるはずのユダの国を攻め入ろうとしています。シリアと共に攻め入ろうとしました。私たちが、霊的に枯渇するとこのような肉の行ないに走ります。同じ信仰者、同じキリスト者に向かって挑みかかります。御霊によってではなく、律法や他の規則にしばられていたガラテヤの教会の者たちに、このことをパウロは見出しました。「・・・互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。(5:15)」

4B 不正な裁判 1-4

10:1 ああ。不義のおきてを制定する者、わざわいを引き起こす判決を書いている者たち。10:2 彼らは、寄るべのない者の正しい訴えを退け、わたしの民のうちの悩む者の権利をかすめ、やもめを自分のとりこにし、みなしごたちをかすめ奪っている。10:3 刑罰の日、遠くからあらしが来るときに、あなたがたはどうするのか。だれに助けを求めて逃げ、どこに自分の栄光を残すのか。10:4 ただ、捕われ人の足もとにひざをつき、殺された者たちのそばに倒れるだけだ。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。

掟は、神の義を示すためのもの、そして弱った人々を建て上げるためのものであるはずですが。ところが、彼らは自分の欲望のために掟さえも変えてしまいます。そして、貧しい者、悩んでいる民をさらに虐げます。これも、実に神の教会の中にも警告として手紙の中には書き記されています。偽教師の存在です(2ペテロ 2 章)。好色や貪欲があつて、それを満たすために教えまでも変えて、そして純朴な人々を食い物にし、心の定まらない人々を誘惑しています。こうした者たちの特徴は、自分の成し遂げたいことがあるのですが、それに沿って聖なる神の言葉を歪曲することを厭わないことです。そして、そのように曲げた言葉によって必ず痛めつけられるのは、純朴な人や、迷いのある人々です。心が定まらない人、まだ信仰が若い人、幼い人々であります。

そして北イスラエルは、アッシリヤによって捕え移されます。彼らが助けを呼んでも、そこに主はおられませぬ。倒れるしかありません。偽預言者もそうですね、イエス様が終わりの日には、「主よ、主よ、私たちはあなたの名によって預言を行ない、悪霊を追い出したではありませんか。」と言つても、「不法を行なう者ども、わたしは全然あなたを知らない。」と言われました。

2A アッシリヤへの裁き 10:5-10:34

このように主は、アッシリヤによってイスラエルに対して裁きを行われます。けれども、次からが大事です。裁きの器として用いられたアッシリヤに対しても、主はしかるべき裁きを行なわれるということです。ここは大切な点です。主は初めに神の家を裁かれます。しかし、なおさらのこと主は、福音に従わない人たちには裁きを怠りなくされるということです。「1ペテロ 4:17-18 なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神

の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。」

私たちがもし、この世にある悪についてそれがいかに悪いかということを追及したところで、神を知らない人々であるから当たり前なことなのです。そして主はその悪に対して裁きを必ず行われます。むしろ、神を知っているとされる者たちの間にこの世的なものが入っている時、それがこれまで読んだ北イスラエルと同じ裁きを受けるのです。まずは、私たちの中からへりくだりが始まらないといけません。主はもしかしたら、世にある悪を見させることによって、私たちの中にもその悪があるのだということをお見せになっているのかもしれない。吟味する、さばかなければいけないのは、むしろ自分たち自身であります。

1B アッシリヤの高慢 5-19

1C 前例による征服 5-11

10:5 ああ。アッシリヤ、わたしの怒りの杖。彼らの手にあるむちは、わたしの憤り。10:6 わたしはこれを神を敬わない国に送り、わたしの激しい怒りの民を襲えと、これに命じ、物を分捕らせ、獲物を奪わせ、ちまたの泥のように、これを踏みにじらせる。10:7 しかし、彼自身はそうとは思わず、彼の心もそうは考えない。彼の心にあるのは、滅ぼすこと、多くの国々を断ち滅ぼすことだ。10:8 なぜなら、彼はこう思っている。「私の高官たちはみな、王ではないか。10:9 カルノもカルケミシュのよう、ハマテもアルパデのようではないか。サマリヤもダマスコのようではないか。10:10 エルサレム、サマリヤにまさる刻んだ像を持つ偽りの神々の王国を私が手に入れたように、10:11 サマリヤとその偽りの神々に私がしたように、エルサレムとその多くの偶像にも私が同じようにしないだろうか。」と。

アッシリヤの罪は何だったのでしょうか？それは、すべての事を私が行っている、というおごりです。すべての事は神から来て、神に拠って成り、神に至るのです。ところが、「すべては私のしていることだ」とするところに高ぶりがありますが、数多くの人々が当たり前のようにそう思っています。そして、アッシリヤは帝国主義でした。帝国主義というのは、それぞれ主権の持つ国々を自分の主権の中にそのまま取り入れてしまうことです。ですから、王たちが自分の高官のようであると言っています。

それから彼らの高ぶりは、「前例があるから、次の成功する」というものに表れています。ここに出てくる具体的な国名を見ると、次第に南下しているのが分かります。北のアッシリヤが最終的にはエルサレムにまで到達します。9 節以降の国名の列挙は、例えば「カルノもカルケミシュのよう」というのは、「カルケミシュは戦ってかったのだから、その南にあるカルノも同じように私たちの物にできるのだ。」ということです。ハマテはさらに南にあります、その手前、北にアルパデがあります。ハマテもアルパデのようではないか、というのは、アルパデを攻略したのだから、同じようにハマテも攻略できる、ということです。つまり、「前に成功しているのだから、次もそのようにするの

だ。」ということです。いかがでしょうか、あまりにも身近な高ぶりです。主が次に何をしようとしておられるのか尋ね求めることなく、「これで私は成功したのだから、次も同じように成功させてみる。」とおごり高ぶっています。

そしてアッシリヤは致命的な過ちを犯しました。北イスラエルには偶像がたくさんありました。彼らを倒した時に、アッシリヤはそれらの神々にアッシリヤの神が征服したとみなしました。だから、エルサレムにおいても、その偶像の神々を倒すことができると決め込んでいるのです。しかし、エルサレムの神は、偶像のように地域に限定されるような方ではありません。エルサレムにご自分の御名を置くことを選ばれましたが、天の天も収めることができないような大きな神、無限の方です。このことが真の神を怒らせます。偶像と同列にご自分を置くことによって、神の栄光を卑しいものに変えてしまったことに対して、怒りを発せられます。それが次の箇所です。

2C あべこべの役割 12-19

10:12 主はシオンの山、エルサレムで、ご自分のすべてのわざを成し遂げられるとき、アッシリヤの王の高慢の実、その誇らしげな高ぶりを罰する。

シオンの山、エルサレムには主ご自身がおられます。天地を造られたまことの神がおられます。

10:13 それは、彼がこう言ったからである。「私は自分の手の力でやった。私の知恵でやった。私は賢いからだ。私が、国々の民の境を除き、彼らのたくわえを奪い、全能者のように、住民をおとしめた。10:14 私の手は国々の民の財宝を巢のようにつかみ、また私は、捨てられた卵を集めるように、すべての国々を集めたが、翼を動かす者も、くちばしを大きく開く者も、さえずる者もいなかった。」10:15 斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができようか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができようか。それは棒が、それを振り上げる人を動かし、杖が、木でない人を持ち上げるようなものではないか。

「私が、私が」と繰り返しています。自分の帝国主義を誇らしげに、捨てられた卵を集めること、彼らが無抵抗であったことを語っています。しかし、ここでとても大切な例えがあります。アッシリヤは斧であって、木こりではありません。ところが、私がそれらをしていると言っているのは、斧が木こりに対して誇っているのと同じだということです。こうした高ぶりも、私たちには身近なものです。主に用いられている生活を送ると、それは自分が何かがあるからだろう、と主に栄光を帰するのではなく、自分自身に栄光を返すことになってしまいます。

10:16 それゆえ、万軍の主、主は、その最もがんじょうな者たちのうちにやつれを送り、その栄光のもとで、火が燃えるように、それを燃やしてしまう。10:17 イスラエルの光は火となり、その聖なる方は炎となる。燃え上がって、そのいばらとおどろを一日のうちになめ尽くす。10:18 主はその美しい林も、果樹園も、また、たましいも、からだも滅ぼし尽くす。それは病人がやせ衰えるように

なる。10:19 その林の木の残りは数えるほどになり、子どもでもそれらを書き留められる。

この強大なアッシリヤが、ここにあるように林の木々に火が付けられるように、一気にその力を失い、卑しめられることを宣言されています。その時に用いられるのは、紛れもなくイスラエル自身なのです。主は、イスラエルの光と火とすと言われていています。そして、主の聖なる姿が炎となると言われます。主から離れてしまったイスラエルの民が、神に立ち返り、その立ち返った残された民に主は共にいてくださり、その聖さによって異邦人の王を滅ぼすのに用いられるということです。思い出すが、ヘロデ・アグリッパ一世です。彼は十二使徒のうち、ヤコブを殺しました。そしてペテロも殺そうと思っていました。ところが、鎖につながれていたペテロに天使が来て、鉤をあげました。その一方で、ヘロデはカイザリヤで演説をしました。すると主の御使いが来て、彼を打ったとあります。神の教会を迫害したヘロデですが、彼がかえって主の怒りによって打たれました。

2B 定められた壊滅 20-34

1C 残りの者の立ち返り 20-27

10:20 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家ののがれた者は、もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもって、たよる。10:21 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。10:22 たとい、あなたの民イスラエルが海辺の砂のようであっても、その中の残りの者だけが立ち返る。壊滅は定められており、義があふれようとしている。10:23 すでに定められた全滅を、万軍の神、主が、全世界のただ中で行なおうとしておられるからだ。

「その日になると」とあります。これは、アッシリヤに攻められる当時のエルサレムのみならず、主がご自分の計画を完成される、究極の主が定められた日ということです。つまり終わりの日ということです。イスラエルでも残された者たちを、主は聖別してくださいます。そこで彼らが行ったことが貴重です。「もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもって、たよる。」自分を打つ者というのは、アッシリヤのことです。アハズが、自分を守るために自分をいじめる者に抛り頼むという、あまりにも自虐的な自傷行為です。しかし、私たちが御霊に抛らず、肉に抛り頼む時に、必ず自分で自分を痛めつけている自傷行為を行っています。しかし、私たちが恐れずに、心を砕いて、主の前に自分自身を持って行く時に、主はその心を癒してくださいます。そして敵から救うという御業を行ってくださるのです。ちなみに21節、「残りの者が、立ち返る」という言葉がありますが、これはイザヤの息子、「シエアル・ヤシュブ」と同じであります。

そして、イスラエルの民が数多くいても、残りの者だけが立ち上がるという言葉も大切です。パウロはこれを、イエスを信じるユダヤ人のことを指してローマ書9章27-28節で引用しています。つまり、イスラエルの血縁的子孫だからと言って、自動的に救いに預かるのではないということです。彼らも狭き門であられる、イエス・キリストを信じて受け入れなければ滅んでしまうということです。そして22-23節は、彼らが神に立ち上がる中で、神がご自身の義を、アッシリヤを滅ぼすことによ

って示されようとしています。

10:24 それゆえ、万軍の神、主は、こう仰せられる。「シオンに住むわたしの民よ。アッシリヤを恐れるな。彼がむちであなたを打ち、エジプトがしたように杖をあなたに振り上げて。10:25 もうしばらくすれば、憤りは終わり、わたしの怒りが彼らを滅ぼしてしまうから。10:26 オレブの岩でミデヤンを打ったときのように、万軍の主がアッシリヤにむちを振り上げる。杖を海にかざして、エジプトにしたように、それを上げる。10:27 その日になると、彼の重荷はあなたの肩から、彼のくびきはあなたの首から除かれる。くびきはあなたの肩からもぎ取られる。」

アッシリヤがエルサレムに示した憤りは、もう少しすれば終わると約束してくださっています。アッシリヤがユダの町々を次々と倒していき、エルサレムを包囲するようになりましたが、それでも恐れなくてよいと救いを保証しておられます。以前に主が行われたことを引き合いに出して、アッシリヤに対しても同じことを行なうと約束されています。ギデオンたちが、ミデヤン人の王オレブをオレブの岩で殺した、とあります(士師 7:25)。また、出エジプトの時にエジプト軍を紅海で沈めた時のようなことをすると言われます。このようにして、自分にいつも負っていたくびきが解かれます。

2C 倒れる高い木 28-34

10:28 彼はアヤテに着き、ミグロンを過ぎ、ミクマスに荷を置く。10:29 彼らは渡し場を過ぎ、ゲバで野営する。ラマはおののき、サウルのギブアは逃げる。10:30 ガリムの娘よ。かん高く叫べ。よく聞け、ラユシャよ。哀れなアナトテ。10:31 マデメナは逃げ去り、ゲビムの住民は身を避ける。10:32 その日、彼はノブで立ちとどまり、シオンの娘の山、エルサレムの丘に向かって、こぶしを振りあげる。10:33 見よ。万軍の主、主が恐ろしい勢いで枝を切り払う。たけの高いものは切り落とされ、そびえたものは低くされる。10:34 主は林の茂みを斧で切り落とし、レバノンに力強い方によって倒される。

これらの町々の名前は、それぞれどこにあるかを調べると鮮明な臨場感に包まれます。アヤテというのは、ヨシュア記のアイの町と同じです。エルサレムから十数キロ北にある町です。そしてゲバ、ラマ、ギブア、ガリム、ラユシャ・・・と、どんどん南、南へ進んでいることがわかります。そしてノブはエルサレムに隣接する町です。そこでこぶしを振り上げたわけです。しかし一夜にして18万5千人のアッシリヤ軍を、主の使いが打たれます。彼らの高ぶりを、たけの高い木々に例えています。レバノンの杉は非常にすばらしいものですが、それらに例えています。

3A 実を結ぶ御国 11-12

こうやって、主は高ぶりというものを低められます。高慢は、破滅に先立つと箴言にあるとおりです。そこには人間の思惑があり、人間の力があります。そのような人間の国がある中で、主はへりくだった姿で世界を支配されるという、神の御国の幻をお見せになります。

1B エッサイの根

1C 主を知る統治 1-10

1D 主の霊 1-5

11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。11:2 その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。

再びイザヤは預言しました、メシヤの出現の預言です。今、アッシリヤが高くそびえる木に喩えられました。ここでは、すでに切り取られてしまった木々の中から、わずかに一つの根株に新芽が出ている、そして若枝が出ているという情景を描いています。これが、私たちの主イエス・キリストの姿です。「エッサイの根株」とありますが、イエス様の父ヨセフの時のダビデの家をよく表しています。ユダの国は、エホヤキンを最後として主は彼から王を出すことはさせないとエレミヤを通して宣言されました。バビロンに捕え移され、その後でゼルバベルなど総督で、ダビデ家の出身という者はいました。けれども、ダビデの家系は次第に削り取られていきます。紀元前から紀元後に移行する時には、ダビデ家はマタイ1章のバビロン捕囚以後の系図にあるように、細々となんとか保っていた、というところだったのです。しかし、そのような何にもない、貧しい家庭の中に主がお生まれになりました。そして、この方がすくすくと育って、それで若枝となり実を結ばせるようになるのです。

主が実を結ばせていかれるのは、御霊が彼の上に留まっているからです。福音書には、主が聖霊によってマリヤから生まれ、そして水のバプテスマを受けられる時に、鳩のような形をして聖霊が下られ、それから御霊によって荒野に入り、そして御霊の力を帯びて福音宣教活動を行われました。そして十字架への道も、ご自分の命を永遠の御霊によってお捧げになり、そして聖なる御霊によると、神が死者の中からの復活により、この方が確か神の御子であることが公に示されたのです。ですから、神の御霊がイエス様に留まっていたが、キリストに付く者にイエス様は、聖霊の約束をされました。それは、ご自身のように御霊によって始まり、御霊によって導かれ、御霊によって完成させてほしいと願われたからでした。

そして、主の御霊の特徴が書かれています。この方は「知恵」の御霊でありました。主ご自身が、知恵によって語られたので、そこには人々の納得があり、落ち着きがあり、一致がありました。知恵から来る実はずは平和であり、純真さです。そして、「悟り」の霊であります。主は、すべてのことを知っておられました。一つの状況を知っておられたので、人に教えてもらう必要がなかったのです。そのことによって隠し立てするのではなく、すべての事を主の前で心を注いで知っていただくということが大事ですね。御霊の賜物の一つに、超自然的にある状況について知らされる、知識の言葉があります。それから、「はかりごとの霊」であります。主が何かをご計画され、それに基づいて実行される時に、主の御霊によってその計画を立てられました。そこには主の知恵と思慮深さがあります。さらに、能力の御霊が主にありました。それは力を示す働きに必要なことです。信仰によって、誰か足のなえた人を立たせることや、病を癒すことなど、力のともなう御霊の働きがあります。

そして大事なものは、最後の二つです。「主を知る知識の霊」であり、また「主を恐れる霊」であります。主を知るとは、親密に知っていること、人格的に知ることです。主ご自身を私たちが親密に個人的に知るには、私たち自身が神に親しく交わりたいと願う思いがなければできません。主を知ることによって、御霊によって知ることによって、私たちはキリストにあってしっかりと治めることができます。それから主を恐れることですが、自分の考えていることは主から次第に離れていってしまう、という現実があります。主を恐れて、悪から離れること。主を恐れることによって、人を恐れられないこと。こうしたことを絶えず意識していることのできるのは、聖なる霊が働いておられるからに他なりません。

11:3 この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、11:4 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。11:5 正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。

イスラエルの国において、不正がはびこっていた時に、彼らは自分の勝手な判断で、裁判において判決を下していたという内容が 10 章 1-4 節にありました。しかし、ここで預言されている主の裁きはその正反対です。「主を恐れることを喜び」とあります。自分の意見や自分の気持ち、ましてや自分の欲望ではなく、主の語られることをそのまま正しい基準として、主ご自身を恐れるのです。イエス様はこのことを思っただけか、次のように発言されています。「ヨハネ 5:30 わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めますからです。」当時、いろいろなことで批評と批判を受けていたイエス様ですが、「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをなさい。(7:24)」と言われました。

そして、主を恐れることの特徴は、「その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず」ということでもあります。どんなに見た目が良かったとしても、聞いていることが心地よいとしても、それにしたがって判決を下してはならないということです。いかがでしょうか、私たちは自分の考えや気持ちを、主が何と語られているのか、聖書の中で何と書かれているのか、そのことを知恵をもって取り出せるように祈るのではなく、勝手にそうした自分の感情や意見を前面に出しては、そこには御霊の働きはありません。そして御霊の実の特徴である、平安あるいは平和は広がりません。

そして、預言は一気に、再臨の中に入ります。初臨においての御霊の働きから、再臨においてアッシリアのように横暴に振る舞っている国々に対して、主はご自分の口という武器をもって、これらの世界から来た軍隊と戦われます。そしてこれらの悪者たちを滅ぼされます。

2D 平和の広がり 6-9

11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。11:7 雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

これまで、主イエスが再臨されてここに立てられる主権は、世界に平和を及ぼすことが預言されていました。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、・・(9:7)」とありました。そしてその平和が、被造物全体に広がります。ノアの洪水の前のように、肉食動物がいなくなり、草食動物だけになります。それは、動物の世界にも争いがなくなることです。なぜなら、主を知ることが全地に満ちるからだとあります。主を親しく知ることが、世界に浸透するので、それで動物界にまで及ぶ平和を享受できます。

被造物が呻き始めたのは、アダムが罪を犯したからです。ですから、被造物が解放されるのも、人の罪が赦され、贖われるからです。「ローマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」主イエス様が再臨されたら、この地上をも贖われ、そして神の初めに意図されていた状態に回復します。

2C 残りの者の帰還 10-16

11:10 その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。11:11 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。残っている者をアッシリヤ、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、海の島々から買い取られる。11:12 主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

「その日」とあります。つまり、これは当時のアッシリヤ捕囚によって散らされた人々というよりも、終わりの日に実現する、世界離散から集められ、一つにされるという約束であります。イエス様が言われました、「マタイ 24:31 人の子は大きなラツパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」イスラエルにとって、約束の地から散らされて、諸国に住んでいるという離散は、救いにあずかれなかったという意味合いを持っています。元々、アブラハムへの祝福にカナンの地を所有するというものがあつたからです。ですから、そこから主が引き戻されるというのは、ここにあるように「買い取る」すなわち、贖うことを意味しています。ですから、再びイスラエルの地に集められるというのは、霊的にとても大切な意味を持っています。

そして、ここに書かれている国々を見ると、全世界的な範囲であることが分かります。アッシリヤ

とエジプト、というだけで、世界的な二大国を網羅しています。それから、クシュはエチオピアのことです。エラムはイランのこと、シヌアルはバビロンのこと。そして海の島々と世界に及んでいます。そこから連れ戻されます。

11:13 エフライムのねたみは去り、ユダに敵する者は断ち切られる。エフライムはユダをねたまず、ユダもエフライムを敵としない。11:14 彼らは、西の方、ペリシテ人の肩に飛びかかり、共に東の人々をかすめ奪う。彼らはエドムとモアブにも手を伸ばし、アモン人も彼らに従う。

イスラエルの回復は、ソロモンの死後分裂したその傷の癒しも含まれます。エフライムとユダはずっと、妬みの中でありました。仲間でありながら競争していました。アハズとペカは敵対関係にいました。しかし、主がその間に仲直り、和解を与えてくださっています。それゆえ、一つにされたイスラエルは強いのです。ペリシテ人も齒向かうことができなくなり、その他の周囲の民もイスラエルに従うようになります。このようにして一つにされるということは、反対者に対して、敵に対して滅びをもたらすしるしとなるのです。「あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。(ピリピ 1:27-28)」

11:15 主はエジプトの海の入江を干上がらせ、また、その焼けつく風の中に御手を川に向かって振り動かし、それを打って、七つの流れとし、くつばきのみまで歩けるようにする。11:16 残される御民の残りの者のためにアッシリヤからの大路が備えられる。イスラエルがエジプトの国から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。

エッセイの根によって、神の国がこのように広がりますが、最後は残された民のための大路を神が備えてくださる、というものです。聞いているイスラエル人たちは、南はエジプト、北はアッシリヤという二つの国に板挟みになっていることを知っています。そこに大路が備えられるということは、そのような大国のせめぎ合いがあるのに、主がそこを贖われた民のために通れるようにされるのです。そして、エジプトもアッシリヤもその真ん中にあるイスラエルに住まわれる神を認めています。ゆえに、エジプトからアッシリヤまで続く大路が大きな意味を持つのです。この一帯が、主を礼拝する地域一帯だということです。エデンの園も、北アフリカからイランまでの広範囲でありました。

4B 救いの喜び 12

そしてイザヤは、残りの民を代表して歌い始めます。

1C 救いの保証 1-3

12:1 その日、あなたは言おう。「主よ。感謝します。あなたは、私を怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださいました。」12:2 見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。

ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。12:3 あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。

午前礼拝で学びました、主の与える救いは、神の怒りからの救いです。イザヤが今、イスラエルに対して神が怒りを示されましたが、それは一時的であり、過ぎ去ったと言っています。そして、大事なのは救いは神からのものだ、ということです。彼らがしたことは、悪だけでした。自分たちでしたことに従えば、滅んでいなければならなかったのです。それにも関わらず、主がご自分の榮譽にかけて、キリストによって彼らを回復されるのです。神がそうするとお決めになって、それでイスラエルを聖なる者、贖われた者に回復されることにしたのです。したがって、私たちが何かできるものではありません。私たちにできることは、そのまま主の前に出てきて、へりくだることです。

そして神が救われたという確信を持っている人は、安心できます。「信頼して恐れることはない」というのは、安心しているという主の救いの恵み、その安定感を言い表しています。どんなことがあっても、主は私を見捨てておられないという安心感です。そしてそこから、喜びが溢れ出ます。

2C 喜びの歌と宣言 4-6

12:4 その日、あなたがたは言う。「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。そのみわざを、国々の民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。12:5 主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。12:6 シオンに住む者。大声をあげて、喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる、大いなる方。」

主に感謝し、ほめたたえています。もしその心が真実なものであるなら、公の場において証しを立てます。主への感謝や賛美、礼拝は感情のものではありません。公にして分かち合っていく必要があるのです。ですから、主の御名を呼び求めます。そして御業を、国々の民、すなわち神をまだ知らない人々に知らせます。その救いの名があがめられていることを語ります。もし私たちが、外に出て語る、あるいは教会という公の場においてさえ語ることをしていなければ、それは神の救いについて、その恵みについて完全に受け入れていないからかもしれません。アハズのように、まだ恐れがあるのかもしれませんが。救いは私たちにかかっているのではなく、エッサイの根株から若枝が出るという、神のなされていることにかかっているのです。そして、主のすばらしさが全世界に伝えられています。これは世界宣教でもあります。

さらに最後に、シオンの中での賛美に戻ります。「イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる」とあります、6章を思い出してください。イザヤは、聖なる、聖なる、聖なるとセラフィムが叫んだその聖なる方の前に立ち、自分はもうだめだと言いました。けれども今、その聖なる方があなたの中におられる、とあります。これは完全に恵みであり、一方的な罪の清めがあるからです。